日本における聖公会初の受洗者・荘村助右衛門

―その人物像とウィリアムズとの交友をめぐって―

中島一仁

はじめに

幕末期の肥後藩士・荘村助右衛門（一八二一〈文政四〉―一九〇三〈明治三六〉）[1]は、日本でいまだキリスト教が禁じられていた一八六六（慶応二）年、米国聖公会の宣教師チャニング・ムーア・ウィリアムズ（一八二九―一九一〇）から受洗したことで知られる。プロテスタントでは前年に神奈川で洗礼を受けた矢野隆山に次いで二人目、聖公会としては日本で最初の受洗者である。

荘村は、日本における最初期のプロテスタント受洗者としてだけでなく、幕末の積極的開国論者として有名な横井小楠の弟子として、また、幕末政局における肥後藩の活動家の一人として、さらには明治維新政府で政情探索を担った太政官少史としても知られる。

最初期のプロテスタントとしては既に明治期のキリスト教史書に記述され、現在までに荘村のことを取り上げた書籍、論文は数多くあるのだが、彼が肥後藩内でどのような役職に就き、何を使命として長崎で活動していたのかという具体的な事実と、受洗との関連が十分に捉えられてきたとは言い難い。ウィリアムズとの交友関係の詳細も十分に明らかになっているとは言えない。本稿ではこれまで利用されなかった史料をできる限り収集し、これら未解明の事項を少しでも明らかにし、併せて荘村の受洗理由を推測することを目的とする。

一、先行研究の整理

荘村の受洗が公になったのは、一八八三（明治一六）

年、大阪で開かれた日本プロテスタント宣教師協議会総会で、ギドー・F・フルベッキが「一八六六年春、監督教会のウィリアムズ主教は肥後のShiomuraに授洗した」と語った講演[2]においてであったと考えられる。一九〇七（明治四〇）年には『教会歴史問答』下巻之下で「聖職ウヰリアムス氏は肥後人ショームラ氏（庄村乎）に洗礼をなせり」[3]とされ、Shiomuraが「庄村」であることが示された。

さらに一九一四（大正三）年、立教大学初代学長・元田作之進が『老監督ウイリアムス』で「庄村氏は武士なりしといへば、肥後の藩士にて、当時長崎に遊学した人であらう」[4]と述べ、この頃にはほぼ、肥後藩士「庄村」が一八六六（慶応二）年に長崎でウィリアムズから受洗したことが明らかになっていた。

立教中学校チャプレン兼教員・前島潔は「庄村」に強い関心を抱き、一九三五（昭和一〇）年に「聖公会史料探訪記」と題した連載を書いた[5]。前島は熊本などで、戸籍を調べたり荘村を知る者たちから聞き取りをしたりして新事実を発掘。「庄村」を荘村助右衛門だと同定し、明治期には「省三」と名乗っていたことも明らかにした。

ウィリアムズ研究の中で荘村について更に人物像を明確化したのが、立教学院史資料センター一五〇年史首席編纂員・大江満の『宣教師ウイリアムズの伝道と生涯：幕末・明治米国聖公会の軌跡』[6]である。一八六八年、ウィリアムズが二、三年前に「日本人コーネリウス」に施洗したと発言していることや、フルベッキが書簡で肥後藩の役人・ショームラがウィリアムズから密かに受洗した教名コーネリウスのクリスチャンであると述べていること、一八六八年のウィリアムズ書簡に荘村が勉学のために渡米を望んでいたことなどを明らかにした。

また、荘村の受洗について、ウィリアムズに西洋兵書の入手を依頼し、それを譲り受けた翌年に洗礼を受けていることから、肥後藩の軍事力強化と受洗が関係している可能性を指摘。荘村の入信は肥後藩の軍司令官としての彼の私的な動機によるものであって、「西洋文明の精神的基盤であるキリスト教に思想的立場から接近したものとみてよいであろう」との見方を示した。

これら立教学院関係者による研究のほか、熊本の幕末維新史や明治新政府の諜報活動などの視角からも荘村研究は進められた。

熊本の幕末維新史からの視点としては、①肥後藩の西洋砲術習得や実学党の活動、②幕末の政局、③イギリス人グラバーら英米人との関係などに分類できる。①では、荘村が肥後藩の西洋流砲術師、池部啓太や横井小楠の弟子であったこと[7]や、長崎海軍伝習に加わっていた

こと[8]が明らかになっている。②では、坂本龍馬、木戸孝允（桂小五郎）らと接触を持っていたこと[9]、③では、海外情報を外国人や漂流帰国者の浜田彦蔵らから仕入れていたことや藩の軍艦購入に関与していたこと[10]が分かっている。

明治新政府で諜報活動を担った太政官官吏としての荘村については、比較的近年明らかになったものである[11]。

このほか、いくつかの書籍で荘村の写真が紹介されているが、これは一九五四年に熊本の郷土史家が荘村の子孫宅で見つけ出したものだ[12]。荘村家の菩提寺が熊本市中央区坪井一丁目の真浄寺であり、助右衛門の墓はそこから離れた同市西区花園七丁目、天福寺裏の墓地にあり、法名は「久遠院晩翠日寿居士」であることが明らかにされている[13]。

二、人物像を探る

（1）基本的事項

まずは、荘村の誕生から死没までの主要な年譜や藩内での身分といった基本的事項を見てみたい。肥後藩家中の家譜である「先祖附」[14]の荘村家・助右衛門の項をまず掲げる。

百石　庄村省三

（中略）

一　十代目庄村助右衛門儀、右一郎助嫡子ニ而候、天保七年八月　御目見仕候、安政元年七月相州御備場大砲備附として被差越、同三年十二月帰着、同月相州御備筒新規出来御用出精相勤、且相州表江被差越候付而者骨折候ニ付、御紋附御上下一具銀二枚被下置、元治元年十二月長州御征伐として左京亮様御出馬之節、御長柄筒百挺司令士被　仰付、慶応二年六月御軍備方役々長崎表出役小銃御買入之節々、砲器類精見致出精候付銀十枚被下置、同三年五月西洋砲術積年心懸厚出精仕自他江懸相倡、且長崎表江被差越候付而者辺稜御用便ニ相成候付、毎歳拾五俵被下置、明治元年十二月四十八歳ニ而父江被下置候御知行無相違被下置、御番方被　仰付大河原次郎九郎組被　召加、同二年九月御用有之御軍艦龍驤丸長崎表廻着次第早々同所江被差越旨及達、同三年二月番士一番隊被　召加、同年四月番士四番隊被召加、同年七月長崎公務懸被　仰付候、座席連枝附大従上坐被　仰付、同月省三与改名

冒頭と終わりの部分から、荘村家は家禄一〇〇石で、助右衛門は天保七（一八三六）年に父一郎助の嫡子として藩主に御目見えし、家督したのは四八歳の明治元（一

八六八）年であることが分かる。この間の彼の活動は部屋住みの嫡子としての資格によるものである。

生没年や配偶者については前島氏が明らかにしている[15]。生まれは文政四（一八二一）年二月一三日で、肥後藩士・下河辺甚左衛門の三女安と弘化四（一八四七）年に結婚、明治三六（一九〇三）年四月二〇日に死去している。男子はなかったようで、慶応四（一八六八）年五月に「野生明冬養子いたし、此節退隠之願書内意差出候手段ニ存居申候」[16]と述べている。前島氏によると、肥後藩士・下津休也三男の一郎が長女直の婿養子となって家督している。

修学期のことはやはり前島氏の研究に詳しい。同氏が、荘村の遠戚に当たる中国哲学・文学者、狩野直喜らに聞いた話として、荘村は初め藩校・時習館に学んだ後、江戸で松崎慊堂に儒学を学んだという。松崎の没年は弘化元（一八四四）年であり、荘村の江戸遊学はこれ以前のこととなる。

【表 1】荘村助右衛門略年譜

年	年齢	事項
文政　4年	1	熊本に生まれる
弘化　4年	27	結婚
嘉永　6年	33	佐久間象山に入門
安政 元年	34	相州警衛に出張
2年？	35	長崎海軍伝習に派遣される
4年	37	池部啓太に従い江戸で砲術を学ぶ
文久 元年	41	長崎別段伝習に派遣される
3年	43	砲器火薬研究のため長崎出張
		ウィリアムズを紹介され、のち2週間にわたって聖書の教えを受ける
元治 元年	44	長崎出張、ウィリアムズ・フルベッキらから情報収集
慶応 元年	45	〃
2年	46	長崎でウィリアムズから受洗
3年	47	長崎で木戸孝允と接触する
明治 元年	48	家督を継ぐ
3年	50	省三と改名
		上京、太政官に出仕
5年	52	病により辞職
		養子一郎が家督
35年	82	妻死去
36年	83	死去

（2）砲術・航海術

基礎的な学問修養の後に荘村が学んだのは砲術であった。兵学者・思想家、佐久間象山の砲術演習に参加した者を記録した「及門録」の嘉永六（一八五三）年・砲術稽古出座帳に「熊本　十二月七日　荘村助右衛門」[17]との記載がある。

ペリー来航を受けた江戸湾防衛として同年一一月、肥後藩が相模国浦賀などでの「相州警備」を幕府に命じられる[18]と、荘村も安政元年七月に派遣され（「先祖附」）、警備陣の一員として海防の現場に身を置いた。

江戸では他藩の家中とも付き合い、砲術の精進に努めたようである。大勢の藩士が佐久間に入門したことで知られる中津藩の兵学師範・八条平太夫の日記には、「肥

後庄村助」が来て懇談したことや、兵隊に進退などを指示する太鼓の叩き方を示すと思われる「譜」を、荘村が持参したことなどが記されている[19]。

この後、安政二（一八五五）年に荘村は長崎で海軍伝習を受けている。これは幕府と参加を許された諸藩を対象としたオランダ海軍士官による軍事教習であり、肥後藩からは藩砲術師範、池部啓太の一派が派遣された。池部は日本での西洋流砲術の元祖、高島秋帆の高名な門弟であり[20]、荘村はその池部の門人であった[21]。荘村は安政三年一二月に帰国、それまでの働きに対し紋附上下一具、銀二枚を褒美として与えられている（「先祖附」）のだが、これ以降、荘村は池部に従ってさらに砲術・航海術修業に忙殺されるようになる。

安政四（一八五七）年七月、荘村は砲術研究のため江戸に行くよう命じられた池部に従い、同じく池部の門人であった太田黒亥和太とともに熊本を出発。三人は江戸到着後の九月、西洋砲術を広く研究し、浦賀駐屯や在府の藩士らに対する指南役・世話役を命じられた[22]。同六年五月、池部と荘村は帰国を命じられている[23]。

この江戸滞在中、荘村は、物理学や化学に精通していた蘭学者、川本幸民に入門したと考えられる。川本の「入門姓名録」に「細川　緒方添書　荘村助右衛門」とあり[24]、「緒方」という者の紹介で入門したと考えられるからだ。

帰国から二年後の文久元（一八六一）年七月には、池部ら三人とともに砲術習得のため再び長崎に出張した[25]。これは先述の長崎海軍伝習の一環として行われた「別段伝習」と言われるものである。佐賀藩が引き続きオランダ人から海軍伝習を受けていることを知った池部が自らも参加を希望し、荘村らを引き連れて行った[26]。

この長崎出張での荘村の具体的な活動が、佐賀藩士・千住大之助に宛てた書簡[27]から窺える。荘村は千住に「扨蔽邑此節ニ到リ漸航海之学研究ニ取掛候」と紹介しつつ、「御熟知之通人気因陋之国柄、一体諸事不開之習風ニ而、且航海之術者小邑蒙昧之事業、別而差当リ困窮仕居申候儀御座候」と、肥後藩の国柄を「因陋」と難じ、まだまだ知識不足であることを白状。佐賀藩は航海術のみならず近代科学の導入に熱心であるとして、「私共拝見不苦候儀も御座候ハ、貴藩御所持之航海書類少々拝見奉願候儀者相叶申間敷哉」と、技術書の借覧を頼んでいる。

文久三（一八六三）年七月、またもや長崎に出張する。今度は大砲・火薬の製造を研究するためである。荘村自身がその必要性を藩家老に建策したものだ[28]。鋳物業で知られ、幕末期には幕府御用の軍需品製作に従事した武蔵国川口[29]の増田弥曽六（八十六とも書く）を熊本

に呼び、長崎へ帯同した。

長崎出張の翌元治元（一八六四）年八月、荘村が長崎から藩へ出した書簡[30]の次の文言は、彼にとって砲術がどのようなものであったのかをよく物語っていると思う。

此許専門之炮術研究も有之、直伝習之手段も都合宜敷、且新聞探索之都合茂能く、旁以今少し此儘ニさし控当今之形勢研究探索両共難被行光景ニも罷成候ハ、罷越候様仕度

この中で「専門之炮術研究」という言葉があるが、彼の自己認識として自分は砲術の専門家であり、その分野の新知識を以て藩の役に立っているのだという自負が感じられる。それに加え、「直伝習」＝長崎で専門家から直接新技術を学ぶことと、「新聞探索」＝情報収集とが自身の役目であると位置づけている。

しばらく後のことになるが、荘村は慶応二年、長崎で藩の軍備方が砲器を購入する際、武器の精査に当たったとして銀一〇枚を下され、同三年からは長年にわたる西洋砲術研究と長崎在駐に対して毎年一五俵が与えられている（「先祖附」）。

次章でも触れるが、荘村は一八六四年一月以前に「八〇〇〇人を従える指揮官」となり、元治元年一二月には「御長柄筒百挺司令士」になっている（「先祖附」）。「長柄筒」が何を指すのか不明だが、恐らくは洋式の銃を備えた部隊なのではないであろうか。「司令士」とは小隊や大隊の隊長を指したようである[31]。肥後藩の武芸教練場であり、池部啓太一門の活動の場であったと推測される演武場に、荘村も「教示方」として関わっていたこと[32]を併せ考えると、荘村は砲術の研究のみではなく藩の部隊の士官にもなっていたようである[33]。

（3）情報収集――ウィリアムズとの出会い

ウィリアムズと荘村との具体的な交友を初めて史料に基づいて明らかにしたのは、前島氏の「聖公会史料探訪記」における記述であるが、それを継承してさらに解明の歩を進めた大江氏の研究に基づいて、これまでに分かっているところをまずはまとめてみる[34]。

一八六四年一月付のウィリアムズ書簡によると、六三年八月、ウィリアムズは長崎で知り合いの日本人から荘村を紹介された。この時、荘村は何冊かの宗教書を受け取り、一、二日後、再び前年にフルベッキからもらった聖書を持って現れた。聖書の内容について知りたいという希望を述べ、それから二週間、毎晩のようにウィリアムズを訪れ、漢訳聖書を読んだ。荘村は熊本に戻ることになり、ウィリアムズ所持の書籍と小冊子の写しや、漢語祈禱書、和文の主禱文、信条、十戒を持って行った。熊本の家で聖書を学ぶことを約束した。

【表 2】荘村助右衛門作成書簡に見る情報源

差し出し年月日	誰から聞いた話か
元治元年 7月12日付	フルベッキ
	英国領事
元治元年 7月20日付	通詞・横山又之丞
	ウィリアムズ
	英学館頭取・何歇之助
	越前生
	歇之助
	越前・加藤鑓之助
元治元年 7月21日付	歇之助
	何齢之助
元治元年 7月22日付	米人
	越前生
元治元年 7月24日付	何礼之助
元治元年 8月 3日付	領事官
	薩摩藩通詞・堀壮十郎
	ウィリアムズ
	何歇之助
	薩摩藩士
慶応元年 5月付	ウィリアムズ
	グラバー
	瓜生三郎
	米国人フレンチ
慶応元年10月付	瓜生三寅
慶応元年11月10日付	瓜生三寅
慶応 2年 4月28日付	坂本龍馬
慶応 2年 6月11日付	フルベッキ
慶応 2年 8月付	佐賀藩士・副島胤臣、大隈重信
	五代友厚
慶応 3年 2月 8日付	坂本龍馬
慶応 2年 8月 6日付	グラバー
	五代友厚
慶応 3年 5月14日付	坂本龍馬
	浜田彦蔵（アメリカ彦蔵）

一八六三年八月といえば、荘村は増田弥曽六を連れて長崎にいたころである。砲術の習得に躍起になっていたはずであり、そのような時期にウィリアムズと知り合い、彼から宗教書を借りた。フルベッキとは既に面識があったのである。

荘村は元治元（一八六四）年七月一〇日に熊本を発ち、一二日に長崎に到着した。同日付の報告書簡で「……此節ハ時体検索被　仰付候……町家ニ止宿仕居申候……然処今早朝布糸別機江罷越し西話時を移シ、其後猶異館へ罷越し英国コンシュル江面会仕居候処、夷情誠以切迫之趣ニ相聞申候……」[35]と述べている。この際の長崎出張は、「時体検索」即ち「情勢探索」を命じられてのものであった。到着当日にフルベッキ（布糸別機）を訪ねて西洋事情に関する会話（西話）をし、さらに英国領事（コンシュル）とも会い、外国側の情勢が切迫していることを察知している。

荘村は自分が砲術を学んでおり、八〇〇〇人を従える地位に昇ったので長崎に戻れなくなったと知らせてきた。だが、もし軍事書の写しをウィリアムズが荘村のために手に入れてくれれば、その解読のために長崎に戻ることができるだろうとのことであった。ウィリアムズは書物を一冊借り、人づてにそのことを荘村に知らせた。大江氏の記すところは以上である。

当時は、長州藩による下関事件を受け、同藩と列強諸国との緊張関係が極度に高まり、西日本方面ではその成り行きに注目が集まっていた。文久三年、長州藩が密かに英国へ留学させた五人の藩士のうち、伊藤博文らが四カ国の報復決議の報に接して元治元年六月に急きょ帰国するに至っている。

荘村は報告書で伊藤らが豊後の姫島に英艦で送り届けられたこと、四カ国と長州との戦争が必至の情勢であることを伝達。情勢次第では下関か横浜に自身が出張して情報収集した方がよいとの意見を記している。

七月一九日には、これらのことに関しウィリアムズから次のような情報を得ている。

……昨日米人宇理也牟斯江罷越同人申聞候趣ハ、各国兵船三隻、長州ゟ紛頓府へ遊学為致有之候書生三人今般長崎へ送リ届、此書生を以長州江申向候ハ、此已後各国之通船相妨候時ハ、不得止事炮撃い多し可申候者、前非を悔候ハ、永親睦を結可申候段申越候処、長人ゟ返答い多し候者此儀長州之主意ニ而無之京都　帝王之勅命ニ付無拠放発致候、如此親睦之相談申入候上者京都へ相伺其上ニ而返答可仕、依之九十日之際相待候様申聞候由、然共最早此尓談難相整、唯延期之策ニ出候事を察し、左様ニハ相待申間敷申切発帆仕候由承候段、米人話し聞申候[36]

四カ国側がロンドン（頓府）から帰った伊藤らを通じ、下関事件を反省するなら今後は親睦を結びたいと申し入れたところ、長州側からは、砲撃は本意ではなく勅命によって仕方なく行ったものであり、親睦の申し入れについては京都に相談したいので九〇日間猶予がほしい、と返事をしたものの、四カ国側は時間稼ぎだとみて出帆するらしいと、ウィリアムズから聞いたことを報告している。

翌八月三日には、改めて長州藩の砲撃に関して、「長州之此行　京都帝王之勅意ニして無拠攘夷い多し候趣ニ各国へ者長州応対仕候との事、米人宇利也牟斯話し聞申候」と、再びウィリアムズからの聞き取りを報告している[37]。

慶応元（一八六五）年にも五月二、三日と続けてウィリアムズに会い、得た情報を熊本に報じている。二日は「米人宇利也牟斯を訪ふ、云米利堅南北戦争之事電信機〈ホトガラヒー〉乃新報、唯今上海より申来、華盛頓大惣督及外国事務宰相両人殺され候由申来、まだ其詳なる事ハ相分不申也ト云」[38]と、南北戦争に関する情報を書き留めている。三日は次のように長文の報告を上げている。

三日晴……米人宇利也牟を訪云四日前神奈川乃朋友書信あり云宇李也牟斯英文を出し日本語に訳し読為聞候大意如左、将軍長防御進発乃事既ニ決議せり、幕吏云此行将軍必す英仏に援兵乃御相談ニ相成可申

存候ト之内話あり、其已後追々応復あり然共表立候而之御沙汰ハ今日迄も未た無之由神奈川書信乃中に申来〇米人云此行援兵乃事英仏へ御相談有之候而も必条御断ニ及可申歟ト見込候由話し聞候事〇又云神奈川一友人書状ニ云近年満清長毛賊与戦ふ、満清援兵を英国に請ふ、英国一人乃大将を撰て満清に遣す、屢戦功あり、其後満清乃諸将其成功を妬ミ英将と間隙を生す、英将怒て長毛賊に帰す、屢賊を助て満清と戦二都府を陥其後支那を奔亡して日本神奈川ニ航し、少時潜匿再ひ神奈川を出帆す、其已来其消息を知らす、若し此英将流て長防ニ入時者此行戦闘甚以六ケ敷可有之候ト記載有之候との事、為日本極々不宜新聞也ト云短翰を出し示す此書状瓜生へ談し写し取訳語を附申度存候事也[39]

「神奈川乃朋友」とは、その地にいた宣教師の誰かではなかろうか。ウィリアムズは受け取った英文の手紙を日本語に訳しながら荘村に読み聞かせている。内容は将軍徳川家茂の長州戦争出陣に当たり、英仏に援軍を求めようとの意見が幕府内にあるが、英仏は断るであろうというものである。

荘村は、ウィリアムズのほかにも外国人から生の情報を仕入れるのが得意であった。中でもグラバーとは特に深い付き合いだったとみられる[40]。その最大の成果の一つは次の極秘情報の取得であろう。

同年五月八日付書簡で荘村は「雅云肥後長防之人与未た極々六ケ敷と承、薩州者少し茂六ケ敷事無之ト云」[41]と報じた。「雅」とはグラバーのこと。既にこの時点でグラバーからの情報として「肥後は長州とまだ関係が難しいと聞くが、薩摩は（長州と）少しも難しい関係ではない」と聞き取っている。この聞き取りの内容が意味するところは、『改訂肥後藩国事史料』五の綱文によると「薩長親和の事等を在留の長崎外人に就きて探知するを得たり」とされる。

文久三（一八六三）年の八・一八政変、翌元治元（一八六四）年の禁門の変を経て、慶応二（一八六六）年一月の「薩長盟約」へと大転換してゆくのはよく知られるところだが、その転換を盟約成立の九カ月前に察知し得ていたとはどのような訳なのか。そこには、「ガラバは、貴君年来御懇意ニ被命、僕も御引合せ被下」[42]と荘村が後年語りかけている薩摩藩士・五代友厚の存在があるのではないだろうか。薩摩藩は慶応元年に入ると、藩地に割拠し幕府と対抗する方針をいよいよ強め、長州藩との提携を模索し始めていた[43]。この当時、グラバーは五代と極めて親しく、薩摩藩とも関係を深めていた[44]。グラバー・五代と結びついた荘村だからこそ得られた最新情報であったのであろう。

（4）キリスト教受洗

『日本基督教の黎明』は、出典不明ながら荘村の受洗時の様子について、「当時師の僕なりしといふ人の談に、或る夜深更に、師は表門と裏口に見張を置き、某外人立会の上、或人に洗礼を授けし」[45]と伝えている。このほかに受洗に関わる史料を探してみたものの、何も得るところはなく、新たな事実を発掘するには至らなかった。せめて周辺事実について若干の検討をしておきたい。

荘村がキリスト教をどのようなものと受け止めていたのかを考える上で、肥後藩実学党の指導者で荘村の師とされる横井小楠の影響については、やはり念頭に置いておく必要があるのではないだろうか。荘村がウィリアムズと接触を重ねていた元治元年から慶応二年ごろの横井のキリスト教観は次のようであったとされる[46]。

キリスト教は哲学から政治、自然科学までを包括する学の大系である。欧米諸国では宗教と政治の「教政一途」が実現しており、法律が守られて学問が進歩し、民生が発展して軍事力が強盛を誇るのも、すべてキリスト教という精神的基盤があるからだ。日本には儒教・神道・仏教があるが、いずれも堕落していたり荒唐無稽の教えであったりして、人心を一致させる方法を持っていないのとは大きな違いだ。しかし、キリスト教を日本へ取り入れればよいというものではない。あくまでも中国古代の「唐虞三代の道」にこそ真理がある。西洋諸国は、弱肉強食とばかりに植民地を獲得する非道も演じている。西洋を他山の石に堯舜孔子の道をよみがえらせ、日本こそが真の世界平和を実現すべきである。

横井はこの当時、積極的開国論者になっており、キリスト教への態度を過去の否定的なものから大きく変え、その社会的な機能の面において極めて高く評価するようになっていたのである。弟子の荘村も同様の考え方を持っていたとみるのが妥当ではなかろうか。

しかし一方でそもそも荘村と横井との「師弟関係」がどの程度のものであったのかは、実はいま一つはっきりしない。後述のように横井から勝義邦（海舟）への使者を荘村が務めていることは両者に関係があることを示してはいるが、実学党の元田永孚が手記に挙げている同党の顔ぶれ、及び反実学党グループが天保一五（一八四四）年時点で調べ上げたメンバーの計四七人に荘村の名はない[47]。実際のところどうであったのかは後考をまちたい[48]。

なお、荘村が、浜田彦蔵（アメリカ彦蔵、ジョセフ・ヒコ）が発行した日本初の新聞『海外新聞』を定期購読していたことはよく知られている。同紙には「開闢のあらまし」と題された旧約聖書創世記に材を取った連載があり、荘村も当然読んだはずであるが、掲載が始まった

のは慶応二年四月以降発行の第一八号からであり、この連載が受洗に与えた影響は考慮せずともよいと考えられる。

次いで、荘村がウィリアムズをはじめとした外国人宣教師と接触し、キリスト教関連書を入手するようになった時期について検討したい。先述のようにウィリアムズとの出会いは一八六三年八月ごろである。一方で六二年にはフルベッキから聖書をもらっている。宣教師らが長崎に住むようになった一八五九年以降で荘村が長崎にいたことが確実なのは、既述のように文久元（一八六一）年七月からである。

その後、これも先述のように文久二年閏八月に佐賀藩士・千住大之助に書簡を送っているが、実は千住はこの月、佐賀藩主の命で熊本を訪れており[49]、荘村はこの書簡を熊本にいて出したものと考えられる。となると、荘村が長崎にいたのは文久元年七月～同二年閏八月の間と推測され、この間にフルベッキと接触した可能性を想定できる[50]。

最後に受洗の日時についてである。『教会歴史問答』は受洗日を「慶応二年（千八百六十六年）二月」としているのだが、旧暦の慶応二年二月のことなのか、新暦の一八六六年二月のことなのかがはっきりしない。そのためであろう、これまでに刊行された書籍では両様の書かれ方がされてきた。

ウィリアムズは荘村への授洗後、中国と日本を管轄する主教に就任するため米国へ帰国するのだが、離日の日ははっきりせず、手掛かりとしては一八六六年三月二四日（慶応二年二月八日）に船便を待って上海にいたということぐらいである[51]。受洗が新旧暦どちらの二月であってもその日に上海にいることは可能であったはずであり、やはり詰め切ることはできない。

場所については、『日本基督教の黎明』に「表門と裏口」は出てくるが、肝心の建物については何も記されていない。受洗は秘密裏に行われたのであるから、ウィリアムズの管理下にあった所だとみるのが妥当であろう。その可能性がある所としては、東山手一一番地の英国聖公会会堂か同五番地の同会宣教師館[52]ではなかろうか。一一番地は現在の海星高校校舎、五番地は活水女子大学東山手キャンパス三・四号館の立つ辺りである。外国人は居留地の土地を借用し建物を購入する権利を持ち、周囲には障壁や門は設けず、日本人も自由に立ち入りできた[53]ので、荘村が立ち入ることは可能であった。

（5）活動家として

受洗前年以降の慶応期、荘村は激動する全国的な政治状況のなかで、肥後藩の活動家の一人として、江戸、京

阪、長崎、熊本を駆けずり回った。特に長崎では木戸孝允や坂本龍馬と接触した。「新聞探索」者からの変身と言えよう。

荘村は元治元（一八六四）年、下関事件を起こした長州藩に対し報復を企てていた英米蘭仏四カ国側に、攻撃の延期を頼むため長崎を訪れていた勝義邦を、二月に一回、三月に二回訪ねている[54]。「横井先生之口上あり」「横井先生之伝言あり」などの勝の日記の記述から、横井小楠の使者としての訪問であったといえる。三回目の三月二三日には同僚藩士で横井の弟子であった河瀬典次、三村市彦と共に、強力な海軍の建設を説いた横井の著作、「海軍問答書」を贈った。

先述のように、慶応元（一八六五）年に入ると、荘村は西南雄藩の代表格である薩長の接近の動きを察知。薩摩藩が仇敵の長州藩と歩調を合わせる方向へと進む驚きの展開に、荘村も諸藩士が集結する長崎で盛んな諜報活動を行っていたに違いない。

同年七月二七日、長州藩の伊藤博文は木戸に対し、「先達而馬関え参り候瓜生三寅と申越前人、既に賢台へも御目に懸り候もの、至而姦物にて肥後庄村某と結合、追々諸方之探索を以幕え申込候由也」と書き送っており[55]、顔も売れていたと想像できる。

瓜生は荘村より二一歳年下の天保一三（一八四二）年、福井生まれ。父は越前藩士であったが処罰を受け、瓜生も福井を追われた。京都で蘭学を学び、万延元（一八六〇）年に長崎遊学。ここでウィリアムズやフルベッキに英学を学んだ[56]。となると、荘村との接点はこの辺りであろう。

荘村は慶応元（一八六五）年一〇月、英国海軍艦長から瓜生が聞き取り和訳した越前藩への報告書を写し取り、丸ごと熊本へと報じている。さらに一一月には、兵庫開港に関する神奈川発行の英字新聞記事を瓜生が翻訳したものを荘村が書写し、熊本へ送っている[57]。瓜生の英語力を自由に利用しており、二人の関係の深さが窺われる。

慶応二年には荘村は、宇和島藩主・伊達宗城、宗徳の側近として知られる同藩家老・松根紀茂（図書）とその子・城臣（内蔵）とも長崎で接触している。同藩の記録[58]に「六月朔日、……荘村助左衛門、越藩八木八十八と申人来」「二日、……五代へ参り、五代も来、荘村来、長咄」「三日、……内蔵荘村招ニて玉川登楼」などとあり、三日連続で接触を重ねている。松根図書は中古蒸気船を購入するため、内蔵は五代友厚と会うために長崎入りしていたという[59]。

『一外交官の見た明治維新』の著者として知られる英国人外交官、アーネスト・サトウの日記にも荘村は登場

する。一八六六年一二月三一日（慶応二年一一月二五日）条には「グラバーと夕食をともにしたが、そこで荘村助右衛門という名前の肥後（熊本）の海軍士官に会った。かれの藩主は、キング提督を訪ねるため長崎に来るつもりだそうである。荘村は、質問にこたえて、もはやふたたび将軍が出現することはなく、天皇が本来の地位に復帰することになると思うと語った。そこで、わたしが、それが『中興』というもんですね、というと、かれは『まさしくその通りです』とこたえた」[60]とある。この時点で荘村は将軍から天皇へと主権者が交代することを予言している。

「中興」を確信してからの荘村は、肥後藩を薩長側に近づけようと画策したようである。従来も肥後藩の基本方針は薩摩藩との提携にあったが、それは薩摩が公武合体論をとっていたからである。横井もこのような趣旨において肥薩提携・征長を是としていた[61]。荘村の動きは藩の基本方針とも師の横井の考えとも違った道だったと言えよう。

慶応三（一八六七）年一月二一日、木戸孝允に書状[62]を送り、第二次長州戦争で肥後藩が長州攻めに加わったことを詫びた。さらに、過日、グラバーの屋敷を訪れた際、偶然同じ時に訪れていた木戸がグラバーを通じて挨拶の言葉を届けてくれたことについて、「僕実に望外之仕合に堪不申候」と感激してみせ、「カラハを以て小介と致し、彼か一本松之別業に相会し長雲肥樹互に握手面尽致候事を得は、野生畢生之素願不過之候」と述べ、一度会って長州・熊本両藩提携の企てについて語りたいとの願いを伝えている。

一方で熊本の坂本彦兵衛に五月一四日、次のように報告している。「坂本良馬（マヽ）云、薩長之際者近来弥以親敷互ニ相往来緩急相救候程之勢ニ成行申候、薩長之交合し候時者恐くハ肥薩之御隣交ハ疎ニ成行交者是亦自然之勢ニ存申候と云」と記し、坂本龍馬の言葉を引用しつつ薩長のさらなる接近が進んでおり、このままでは逆に薩摩藩と肥後藩との関係悪化を招きかねないと懸念。坂本龍馬に対し「何卒貴兄御紹介を以桂輩江面会致……度御紹介被下間敷哉」と木戸との面会を仲立ちしてくれるよう頼んだところ、「荘村より桂輩へ面会取組迄之処は何分ニも相働、御為合ニ相成候様周旋可致候」と坂本も仲介を了承した[63]。

これら荘村の一連の動きが坂本彦兵衛らの了承を得たものであったかどうかは分からないし、荘村が木戸や西郷隆盛のような藩指導者であったわけでもない。荘村の行動には、とにかく情勢の変化に肥後藩が後れを取らないようにしたいという焦燥が感じられる。そして、その背後には、肥後藩を薩長同盟に参加させたいと考えた坂

本の思惑があったのではないだろうか[64]。

坂本は六月一日、木戸に書状[65]を送り、「扨兼御心安キ肥後庄村助右衛門度ゝ面会、大兄に御目かゝり度よし」と伝え、荘村に会うよう促した。その訳については「其故ハ云々――――（此間ハ石田栄吉よりくハ敷申上ル御聞取ニて御返書奉願候）」とだけ記し、海援隊士の石田英吉から内密に口頭で伝えた。

しかし、結果は坂本・荘村の期待と大きく異なるものだったようである。そもそも木戸は荘村ときちんと会って話をしなかったのではないかと思われる。木戸は八月二一日、坂本への書状[66]の追伸で「尚々此夕は庄村一件御供申上度奉存候」と記しながら、荘村は四日後の木戸宛て書状で「先時は途中に而奉得拝容雀躍仕候」としており、道ばたで会っただけのようであるからだ。

なぜ、木戸の側は荘村との会談に前向きではなかったのか。八月の坂本宛て書状案[67]では、第二次長州戦争で熊本藩が先鋒を務めたことや、同戦争で敗れた小倉藩主を領内で保護したこと、将軍家を尊重し薩摩藩を悪し様に言ったのを聞いたことなどを挙げ、「（荘村は＝筆者注）至而懇切之尋に預り書中、肥薩長雲互に握手云々など之事も有之感心仕候儀に付、直様報復可致と存居候得共、前段之次第に付而は同氏之説と御国論とは弥相違にも有之候歟に被相察候間、自然も一封之書よりして嫌疑を起し同氏之迷惑等も有之候而は不相済ト控居候事に御座候」と記している。荘村はしきりに提携を求めて来るが、長州戦争以来の藩としての動きをみると、荘村の所説との違いが大きすぎると言うのである。

木戸の疑念を解消させることはできず、坂本・荘村の肥薩提携策はこの時点で実を結ぶ可能性はなくなっていた。だが、荘村の努力はまだ続いた。サトウの一八六七年一〇月一二日（慶応三年九月一三日）の日記[68]は、当時、長崎滞在中であった英国領事に、荘村とともに接触してきた肥後藩主の弟である長岡護美（良之助）について、「桂（小五郎）としたしいこと……など、懸命にしゃべりたてた。……かれは家老のひとりを連れて下関へゆき、肥後と長州の友好同盟の打ち合わせをするつもりであるといっていた」と記している。だが、そのようなことは実現しなかった。

この後も、荘村は長崎だけでなく江戸や京阪に行き、さまざま活動した模様である。当該時期に京都や長崎に出張した熊本藩士・吉田鳩太郎の記録[69]には随所に荘村の名が出ており、五代友厚など諸藩士らや浜田彦蔵などとの接触が分かる。また、具体的な職務は分からぬものの江戸に出張し、慶応四（一八六八）年二月一〇日まで滞在し、一八日に長崎に帰った。次は京都に上っている。休む間もなく江戸から熊本の間を駆け回っていた。

三、受洗・入信の動機――まとめにかえて

本稿の目的は、日本で二番目のプロテスタント受洗者としての荘村の人物像を追究することにあるので、明治維新後の彼の行動は追わないこととする。彼にとって受洗とは何であったのかを検討し締めくくりたい。

荘村の受洗の前後を振り返ってみると、彼は藩のために西洋砲術の導入と政治情報の入手に文字通り駆けずり回っており、着実に手柄も挙げていたと言えよう。やはり受洗が現代人が考えるような宗教的な理由からであったとは考えにくい。しかし一方で、ウィリアムズから何かを得るための「取り引き」として受洗したというようなこともないであろう。なぜなら、既に見たようにそうせずとも荘村はウィリアムズから重要な情報を現に得ていたし、軍事書も手に入れていたからである。

となると、砲術を専門とし、幕末最大の化学者であった川本幸民に入門もしていた「洋学学習者」としての彼の経歴に何らかの動機を求めるのが自然なのではなかろうか。高度な科学技術を生み出した西洋列強の力の源を探ろうとするなかで、その奥にあるものを見つけ、儒学に代わる国家統治の道を見つけようとしたのが、彼にとっての受洗であったのではないだろうか。

これらのことは、既に前島氏と大江氏が書かれていることであり、残念ながら新しい見方を示すことは出来なかったが、敢えて言うなら荘村の歩みをより詳しくたどることにより、彼が受洗に至った道のりを見る上でより豊富な事実を示せたのではないかと考える。

それにしても、前島氏が「洋学の精神は耶蘇教である。洋学の徹底するところ耶蘇を信じなければならない」と考えたはずだとしているのは、荘村の心理を喝破していたと言うしかない。洋学を究める「免許」のようなものとして「洗礼」を捉えていたのではないかとの推測もうなずける(20)。

そうであれば、どうしても気になるのは横井小楠のキリスト教観が影響したのかどうか、影響したのであればどのようにしたのか、ということである。先述したようにこの師弟関係は具体的には分からないことが多い。今後に残された課題である。

註

(1) 引用する史料・文献によっては「庄村」としているものがあるが、後に触れるように明治期の戸籍が「荘村」としていることからそれに従う。通称は、助右衛門の前に右兵衛といったようだ（山口県教育会編『吉田松陰全集』九（大和書房、一九七四年）八三頁）。これも後述するが、明治三（一八七〇）年に「省三」と改名している。また、明治期の職員録を見ると諱は「彝臣」である（読み方は「つねおみ」か）。本稿では、最もよく使われる維新前の名前「助右衛門」を使う。

(2) G. F. Verbeck, History of Protestant Missions in Japan, *Proceedings of the General Conference of Protestant Missionaries of Japan*, R. Meiklejohn, 1883, p.51.

(3) 菅寅吉編『教会歴史問答』下巻之下（一九〇七年）（復刻版、鈴木範久監修『近代日本キリスト教名著選集　第二期（キリスト教教派史篇）』一一（日本図書センター、二〇〇三年））一〇頁。

(4) 元田作之進『老監督ウイリアムス』（京都地方部故ウイリアムス監督紀念実行委員事務所、一九一四年）（復刻版、『日本基督教の黎明（老監督ウイリアムス伝記）』〈立教出版会、一九七〇年〉）九三頁。

(5) 前島潔「聖公会史料探訪記」一～一一『基督教週報』七〇（一三）～（二四）（一九三五年）。

(6) 大江満「宣教師ウイリアムズの伝道と生涯：幕末・明治米国聖公会の軌跡」（刀水書房、二〇〇〇年）二三三～二四一頁。

(7) 新熊本市史編纂委員会編『新熊本市史　通史編』五（近代一）（熊本市、二〇〇一年）四二三～四二七頁、木山貴満「新渡西洋流砲術師池部啓太と熊本藩の洋式軍備化」『国文研究』五五（二〇一〇年、熊本県立大学日本語日本文学会）、花立三郎「荘村助右衛門：日本最初の受洗者」『横井小楠の弟子たち：熊本実学派の人々』（藤原書店、二〇一三年）一一三～一二〇頁など。

(8) 瀬戸致誠「幕末肥後藩と長崎海軍伝習」『熊本県高等学校社会科研究会研究紀要』二〇（一九九〇年）、前掲『新熊本市史　通史編』五、四一九～四二三頁など。

(9) 木戸公伝記編纂所編『松菊木戸公伝』上（明治書院、一九二七年）七九八～八〇七頁、一坂太郎「肥後藩　幻の薩長『肥』連合：坂本龍馬の『討幕化』工作」『歴史読本』四二（四）（一九九七年）、木山貴満「荘村助右衛門の慶応三年『崎陽新聞』について」『熊本博物館館報』二五（二〇一三年）六二～八〇頁など。

(10) 菱谷武平「雅羅馬考」『社会科学論叢』七（長崎大学学芸学部、一九五七年）、神奈川県県史編集室編『神奈川県史　各論編』三（神奈川県、一九八〇年）五一〇、五三〇～五三七頁、白石烈「幕末肥後藩の政治活動とその背景：蒸気船購入問題を中心に」稲葉継陽・今村直樹編『日本近世の領国地域社会：熊本藩政の成立・改革・展開』（吉川弘文館、二〇一五年）など。

(11) 落合弘樹「密偵荘村省三と不平士族」佐々木克編『それぞれの明治維新：変革期の生き方』（吉川弘文館、二〇〇〇年）、大日方純夫『維新政府の密偵たち：御庭番と警察のあいだ』（歴史文化ライブラリー）（吉川弘文館、二〇一三年）一～二〇、二一六～二二一頁など。

(12) 「キリシタン細川藩士　荘村氏の写真発見」『熊本日日新聞』一九五四年一一月七日付朝刊。

(13) 高田素次「荘村家の墓」『ジョセフ彦記念会誌』一三（一九八〇年）。

(14) 「先祖附『レ』の部　南東五一」（熊本県立図書館、複写本、細川家北岡文庫原蔵）。（以下、本稿では引用史料は筆者が適宜、読点をつけ、変体仮名は一部、現用字体に変えた）

(15) 前掲「聖公会史料探訪記」五（庄村家の戸籍）。

(16) 浜田彦蔵宛て荘村助右衛門書簡、『ジョセフ彦記念会誌』二〇（一九八六年）一〇頁。なお、年代推定は、書簡中に「二月十八日熊本着」とあることが、木山貴満「収蔵資料紹介　吉田家文書『上京公私諸控』」『熊本博物館館報』二六（二〇一四年）三一頁に、慶応四年の同日に江戸から熊本に帰着した旨の記述があることと符合することによる。

(17) 信濃教育会編『増訂　象山全集』五（信濃毎日新聞株式会社、一九

三五年）所収の附録「訂正及門録」七七二頁。

⑱ 前掲『新熊本市史　通史編』三（近世一）（二〇〇一年）五四七～五五六頁。

⑲ 山家克己『八条半坡伝』（山家昌久・史郎、私家版、一九八五年）所収の「在府日記」三一一頁の安政二年五月三日条と三三四頁の同年一〇月二五日条。

⑳ 前掲『新熊本市史　通史編』五、四一九～四二三頁など。

㉑ 「相州御備場一件」細川家編纂所編『改訂肥後藩国事史料』一（侯爵細川家編纂所、一九三二年）八八〇頁に「同人（＝池部、筆者注）門弟之内庄村助右衛門、庄林曽太郎」と書かれていることから明らかな事実と言えよう。

㉒ 「相模国御備場御用一件」前掲『改訂肥後藩国事史料』一、九〇四・九〇五頁、前掲「相州御備場一件」前掲『改訂肥後藩国事史料』一、九一四頁。

㉓ 「安政六年江戸機密間日記」前掲『改訂肥後藩国事史料』二（一九三二年）三四四頁。

㉔ 「入門姓名録」（川本幸民関係資料一七、日本学士院蔵）。入門年月日が記されていないが、同資料八六「木挽町住居ノ時来学者ノ姓名」と題された入門帳以前のものであるため、川本が木挽町に引っ越した安政四年までに荘村は門弟になったと考えられる。

㉕ 「万延元年機密間日記」前掲『改訂肥後藩国事史料』二、七七三・七七四頁。

㉖ 前掲『新熊本市史　通史編』五、四二三頁など。

㉗ （年欠）閏八月一八日付千住大之助宛て荘村助右衛門書簡（千住西亭文書二二、佐賀県立図書館所蔵複製本、原本個人所蔵）。幕末期で閏八月があるのは文久二年のみであるので、その年のものと推定される。

㉘ 「小笠原備前日録」前掲『改訂肥後藩国事史料』三（一九三二年）七六八頁、「文久三年機密間日記」前掲『改訂肥後藩国事史料』四（一九三二年）一二・一三頁。

㉙ 『川口市史　通史編』上（同市、一九八八年）六九九～七〇四頁。

㉚ 「尊攘録　新聞紙并夷情検索等（文久二年―慶応三年）三」元治元年八月三日付長崎発坂本彦兵衛・葉室慎助宛て荘村助右衛門書簡（熊本藩幕末史料第三九、東京大学史料編纂所所蔵写真帳、永青文庫原蔵）。

これ以降、荘村書簡の宛所となっている肥後藩士について検討しておきたい。【坂本彦兵衛】奉行所機密間佐弐（さじ）役（武藤厳男編『肥後先哲偉蹟　後篇』〈同刊行会、一九二八年〉二八九頁）。【葉室慎助】御擬作一〇〇石であったこと（高野和人『肥後細川家分限帳』〈青潮社、一九九一年〉）以外は詳細不明。【古小路嘉右衛門】「奉行所機密間根取」としている史料を確認できる（神奈川県県民部県史編集室編『神奈川県史　資料篇』一〇〈同県、一九七八年〉四二五頁）。

㉛ 勝海舟『勝海舟全集』一六（陸軍歴史二）（勁草書房、一九七六年）四七〇～四七四頁の江戸幕府講武所部隊編成表による。

㉜ 前掲「新渡西洋流砲術師池部啓太と熊本藩の洋式軍備化」六八～七四頁。

㉝ 荘村が八〇〇〇人の指揮官であったというのは、ウィリアムズの書簡に記されていることである。原文の "JAPAN-Letter from the Rev. C. M. Williams," *The Spirit of Missions*, vol.29, 1864, p.149 でも、確かに "the command of 8000 men" とされている。ただ、長柄筒百挺の部隊長になる前に「八〇〇〇人を従える指揮官」であったのは不自然であり、ウィリアムズが日本語を英語に直す際の訳し間違いの可能性も

ありうるのではないだろうか。

(34) 前掲『宣教師ウイリアムズの伝道と生涯』二三七・二三八頁。

(35) 前掲「尊攘録　新聞紙并夷情検索等（文久二年―慶応三年）三」元治元年七月一二日付長崎発坂本彦兵衛宛て荘村助右衛門書簡。

(36) 同前、元治元年七月二〇日付長崎発坂本彦兵衛・葉室慎助宛て荘村助右衛門書簡。

(37) 同前、元治元年八月三日付長崎発坂本彦兵衛・葉室慎助宛て荘村助右衛門書簡。

(38) 「佐田文書長崎新聞書」慶応元年五月付荘村助右衛門書簡、前掲『改訂肥後藩国事史料』五（一九三二年）八四六頁。

(39) 同前、八四七頁。

(40) 前掲「雅羅馬考」一、一〇・一一頁、菱谷武平「長崎に於ける冒険商人の性格：雅羅馬とグラバー邸」『社会科学論叢』一一（一九六一年）三六・三七、四二・四三頁。

(41) 前掲「佐田文書長崎新聞書」慶応元年五月付荘村助右衛門書簡、前掲『改訂肥後藩国事史料』五、八七四頁。

(42) 明治二年四月二四日付五代友厚宛て荘村助右衛門書簡、日本経営史研究所編『五代友厚伝記資料』四（東洋経済新報社、一九七一年）一三三頁。

(43) 町田明広「慶応期政局における薩摩藩の動向：薩長同盟を中心として」『神田外語大学日本研究所紀要』九（二〇一七年）。

(44) 犬塚孝明「第一章　十五人の留学生」『薩摩藩英国留学生（中公新書）』（中央公論社、一九七四年）。

(45) 前掲『日本基督教の黎明』九四頁。

(46) 徳永新太郎『横井小楠とその弟子たち』（日本人の行動と思想四三）（評論社、一九七九年）一一～一〇四頁、松浦玲『横井小楠（ちくま学芸文庫）』（筑摩書房、二〇一〇年）一五〇～一五二頁。

(47) 鎌田浩『熊本藩の法と政治：近代的統治への胎動』（創文社、一九九八年）五二二～五二五頁。

(48) 前掲『横井小楠とその弟子たち』と同『横井小楠の弟子たち：熊本実学派の人々』も横井と荘村の関係の始まりを説明してはいない。前島氏が『聖公会史料探訪記』四で、荘村が実学党メンバーの名門・下津休也の子一郎を養子にできたのは、「恐らくは荘村氏も、熱心なる開国論者たりし小楠一派と予てより意気相通じ且つ師事してゐた為め」としたのが、そのまま定説になったのではないだろうか。横井の私的な使者を務めたことのほか、嘉永六（一八五三）年に吉田松陰が熊本を訪れ、横井や荻昌国・矢嶋源助などの横井の高弟と会った際、荘村も会っていること（山口県教育会編『吉田松陰全集』一〇（岩波書店、一九三九年）四一一頁）や、明治新政府参与として京都に滞在していた横井が熊本の家族に宛てた書状に、「先日宮川急帰にて最早到着と存候、此許之成り行い才御承知と奉存候。引き続き庄村帰省是又同様」などと親しげに記していること（山崎正董編『横井小楠遺稿』（日新書院、一九四三年再版）五三四頁）なども補強材料とされたのかもしれない。

(49) 千住健任著、千住武次郎編『西亭遺稿』（千住武次郎、一九二九年）付録「西翁略歴」二丁に「同年（＝文久二年、筆者注）閏八月再ヒ肥後侯へ側使被命」とある。

(50) 村瀬寿代訳「フルベッキ書簡（一）一八六〇年一月一四日～一八六一年三月一六日付書簡」『関西英学史研究』七（二〇一二年）七八頁で同氏は、より明確に一八六一年三月一四日（＝文久元年二月四日）に荘村がフルベッキと会い、四福音書を受け取ったのではないかと推測している。

(51) 前掲『宣教師ウイリアムズの伝道と生涯』二五三・二五四頁。
(52) 同前、二二二～二二四頁。
(53) 石井孝『日本開国史』（吉川弘文館、二〇一〇年）三四三頁。
(54) 東京都江戸東京博物館都市歴史研究室編『勝海舟関係資料　海舟日記一』（江戸東京博物館史料叢書）（同館、二〇〇二年）二七〇、二七三、二七八頁。松浦玲『勝海舟（中公新書）』（中央公論社、一九六八年）一二三頁。
(55) 慶応元年七月二七日付木戸孝允宛て伊東博文・井上馨連名書簡、木戸孝允関係文書研究会編『木戸孝允関係文書』一（東京大学出版会、二〇〇九年）二一三頁。
(56) 渡辺宏「瓜生寅の履歴と著作」『日本古書通信』四四（二）（一九七九年）。
(57) 「元治元年ヨリ慶応元年迄探索書、慶応元乙丑年尊攘録探索書」荘村助右衛門書状写、前掲『改訂肥後藩国事史料』六、三〇八・三〇九頁、「尊攘録　新聞紙并夷情検索等（文久二年―慶応三年）五」慶応元年一一月一〇日付長崎発古小路嘉右衛門・坂本彦兵衛宛て荘村助右衛門書簡（熊本藩幕末史料四一、東京大学史料編纂所所蔵写真帳、永青文庫原蔵）。
(58) 宇和島・吉田旧記刊行会企画・編集『宇和島・吉田旧記』七（松根図書関係文書）（佐川印刷所刊行会、一九九九年）一〇四頁。
(59) 愛媛県史編さん委員会編『愛媛県史』近世下（愛媛県、一九八七年）七二三頁。
(60) 萩原延寿『遠い崖：アーネスト・サトウ日記抄』四（朝日新聞社、一九九九年）一〇二頁。
(61) 森田誠一「幕末・維新期における肥後熊本藩：特に明治維新への参加をめぐって」藤野保編『九州と明治維新』一（九州近世史研究叢書一二）四五九～四六二頁。
(62) 慶応三年一月二一日付木戸孝允宛て荘村助右衛門書簡、前掲『木戸孝允関係文書』四、二九五頁。
(63) 「尊攘録探索書」慶応三年五月一四日付坂本彦兵衛宛て荘村助右衛門書簡、前掲『改訂肥後藩国事史料』七（一九三二年）四〇四頁。
(64) 前掲「肥後藩：幻の薩長『肥』連合：坂本龍馬の「討幕化」工作」。
(65) 慶応三年六月一〇日付木戸孝允宛て坂本龍馬書簡、宮地佐一郎編集・解説、平尾道雄監修『坂本龍馬全集（増補四訂版）』（光風社出版、一九八八年）二三六・二三七頁。
(66) 慶応三年八月二一日付坂本龍馬宛て木戸孝允書状、木戸公伝記編纂所編『木戸孝允文書』二（日本史籍協会、一九三〇年）三〇七・三〇八頁。
(67) 慶応三年八月付坂本龍馬宛て木戸孝允書簡案、前掲『木戸孝允文書』二、三一二～三一四頁。
(68) 前掲『遠い崖：アーネスト・サトウ日記抄』五（一九九九年）三三九・三四〇頁。
(69) 前掲「収蔵資料紹介　吉田家文書『上京公私諸控』」。
(70) 前掲「聖公会史料探訪記」一一。